

またまた突然ですが、今週はノーベル賞にまつわる特集を④ 今更ながら、美術をして何になるのか？役に立つのか？を！

◆2012年度のノーベル賞に輝いた山中伸弥教授の「iPS細胞の発見とその実用化」 2016年ノーベル賞大隅良典教授の「細胞自食作用（オートファジー）」、進路通信で紹介した2015年度ノーベル賞大村教授の「イベルメクチン」らは、人類や社会に大きく貢献している。

◆以前、文理学科の小論文の出題文に「学問の世界において学ぶことは、考えることの喜びだ」と書いてあった。「発見」と「創造」にこそ喜びがあり、意味があると・・・

◆美術においても、発見と創造にこそ喜びがあり、意味がある。しかし、美術は直接的には役に立たない。

◆だから「5教科は必要だが、美術教育はいらない」という人たちもいる、「芸術は、一部の限られた生徒だけに学習させとけばよい」という人たちもいる。

◆文部科学省でも、中学校の「美術と音楽を0時間にする」案が、出されたことがあった。高校のように書写と音楽と美術と工芸を選択教科にすればという案だ。結局、美術と音楽は週1時間になったけど。

美術なんて無駄だ！金にならない！実用性がない！・・・確かに。
 でも本当に、美術は無駄なのか？価値がないのか？社会に貢献していないのか？
 文化活動発表会（合唱コンクール・展示発表）は無意味なのか？

損／得・役に立つ／立たない・有効／無駄 等々 二元論思考からの脱却を！！
 0でもない1でもない、かといって0.5でもない世界（価値）観を
 佐藤忠良の言葉を



鋭い社会風刺画で知られる覆面アーティスト、バンクシーが描いた、新型コロナウイルスの感染者の治療にあたっている看護師をスーパーヒーローとしてたたえる新たな作品。作品には、バットマンやスパイダーマンといったスーパーヒーローの人形に見向きもせず、マスク姿で、胸に赤い十字架が記された看護師の制服を着た人形で遊ぶ男の子の様子が描かれています。イギリスの公共放送BBCによりますと、この作品には「国営の国民医療サービス、NHSのスタッフの皆さんがしてくれているすべてのことに感謝します。作品は白黒ですが、少しでも病院に彩りを添えられたらうれしいです」などと医療従事者への感謝のことばをつづったメモも添えられていたということです。

この美術館もイイよ。茶室もある。お茶は要予約です。

＜佐川美術館ホームページからの抜粋＞

『芸術は人生の必要無駄』

これは、佐藤忠良氏が残した言葉です。
 人生の必要無駄とはどういう意味でしょうか。

佐藤氏は作家としての創作活動の他に、図工・美術教科書の編纂という教育者としての一面を持っており、自身が携った教科書の中に、『芸術は人生の必要無駄』について述べた文章があります。＜裏面参照＞

私たちの生活の中には、好きだとか嫌いだとか、美しいとかみにくいとか、ものに対して《感ずる心》があります。

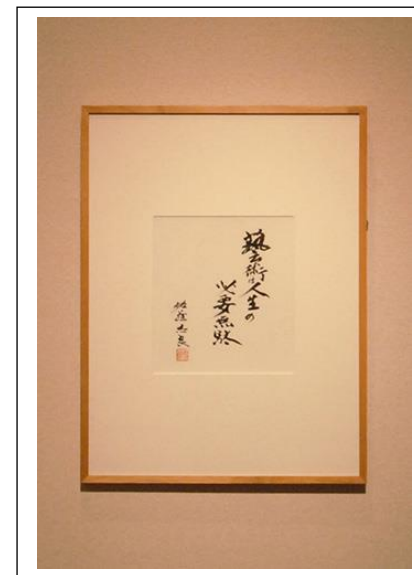
この《感ずる心》というのは、みなそれぞれに違い、生きていく上で必要不可欠なものと佐藤氏は考えています。芸術というのは、そうした心が生み出したものだといえます。

しかし、芸術そのものには日常生活の環境を変えることはできません。それは一見、直接役に立たない無駄なものだと捉えられるかもしれませんが、佐藤氏はこれについて次のように述べています。

「この直接役に立たないものが、心のビタミンのようなもので、しらずしらずのうちに、私たちの心のなかで蓄積されて、感ずる心を育てるのです。」＜裏面参照＞

芸術にたくさん触れてほしい、子どもたちに《感ずる心》を持ってほしい、そういった佐藤氏のねがいが『芸術は人生の必要無駄』という言葉の中に込められているのです。

裏面参照



佐藤忠良プロフィール



明治 45 年、宮城県黒川郡生まれ。彫刻家。
少年時代を北海道で過ごし、絵画を学ぶために上京するが、ロダン、マイヨール、デスピオなど新しい生命主義の作品に感銘を覚え彫刻家を志す。

東京美術学校（現東京藝術大学）を卒業後、新制作派協会（現新制作）を舞台に活躍。

昭和 19 年に兵役に招集、終戦後のシベリアでの抑留生活を経て帰還後に制作を再開。

その体験から、平凡なごく普通の日常生活の中でほんの一瞬だけ垣間見る「人間の美」を追求した作品を多く手掛ける。

昭和 56 年には、パリの国立ロダン美術館で日本人初の個展を開催。
その功績により、フランス・アカデミー・デ・ボザールの客員会員に推挙されるなど、国際的にも高い評価を得ている。

美術を学ぶ人へ

美術を学ぶ前に、私が日ごろ思っていることを、みなさんにお話します。というのは、みなさんは、自分のすることの意味—なぜ美術を学ぶのかという意味を、きっと知りたがっているだろうと思うからです。

私が考えてほしいというのは、科学と芸術のちがいと、その関係についてです。みなさんは、すでにいろいろなことを知っているでしょうし、またこれからも学ぶでしょう。それらの知識は、おおむね科学と呼ばれるものです。科学というのは、だれもがそうだと認められるものです。

科学は、理科や数学のように自然科学と呼ばれるものだけではありません。歴史や地理のように社会科学と呼ばれるものもあります。これらの科学をもとに発達した科学技術が、私たちの日常生活の環境を変えていきます。

ただ、私たちの生活は、事実を知るだけでは成り立ちません。好きだとかきらいだとか、美しいとかみにくいとか、ものに対して感ずる心があります。これは、だれもが同じに感ずるものではありません。しかし、こういった感ずる心は、人間が生きていくのにとっても大切なものです。だれもが認める知識と同じに、どうしても必要なものです。

詩や音楽や美術や演劇—芸術は、こうした心が生み出したものだといえましょう。この芸術というものは、科学技術とちがって、環境を変えることはできないものです。しかし、その環境に対する心を変えることはできるのです。詩や絵に感動した心は、環境にふりまわされるのではなく、自主的に環境に対面できるようになるのです。

ものを変えることのできないものなど、役に立たないむだなものだと思っている人もいるでしょう。ところが、この直接役に立たないものが、心のビタミンのようなもので、しらずしらずのうちに、私たちの心のなかで蓄積されて、感ずる心を育てるのです。

人間が生きるためには、知ることが大切です。同じように、感ずることが大事です。私は、みなさんの一人一人に、ほんとうの喜び、悲しみ、怒りがどんなものかがわかる人間になってもraitたいのです。

美術をしんけんに学んでください。しんけんに学ばないと、感ずる心は育たないのです。
(「少年の美術」 1984 年 現代美術社)